人文地理 第53巻第2号（2001）

遍路道にみる宗教的意味の現代性

——道をめぐるふたつの主体の活動を中心に——

森　正人

Ⅰ　はじめに
(1)　巡礼現象へのアプローチ
(2)　問題の所在
Ⅱ　遍路道の宗教性と行政による遍路の「発見」
(1)　遍路道について
(2)　遍路の文化的価値の「発見」と活用
Ⅲ　「四国のみち」の整備
(1)　歩道整備と「四国のみち」
(2)　遍路道の調査
(3)　建設省による整備
Ⅳ　もうひとつの遍路道
(1)「へんろみち保存協力会」について
(2)　保存協力会による遍路道の比定と復元
(3)　遍路道における意味の差異化
Ⅴ　おわりに

キーワード：景観　四国八十八か所　遍路道　自然歩道　文化遺産　宗教的意味

Ⅰ　はじめに

(1)巡礼現象へのアプローチ　宗教現象を対象とする人文地理学的研究は，巡礼にも関心を向けてきた。歴史的資料を用いた巡礼ルートの復元[1]と，統計をもとにした巡礼者の空間移動パターンの解明[2]はながくその中心テーマを構成してきた。また人文主義地理学の影響のもとでは，巡礼地あるいは聖地のコスモロジーやその象徴的な意味を，巡礼者の主観をもとに読み解こうとする研究も行われた[3]。人文主義地理学での宗教に関する研究は，聖地や宗教景観のもつ宗教性を所与のものとして扱うのではなく，個人の主観や，巡礼者による意味の付与という視点を提供したことに意義があったが，他方では，宗教的景観や場所を生み出す社会的・政治的背景についての関心が乏しいという限界があった[4]。

人文主義地理学の限界を乗り越えるものとし

1）①田中智彦「大坂廻りと東国の巡礼者」歴史地理学142，1988，1-16頁。② Isaac, E., 'The pilgrimage to Mecca', *The Geographical Review*, 63-4, 1973, pp. 405-409.

2）① Bhadwaj, S., *Hindu places of pilgrimage in India*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1973. ② Brown, B., 'Overland pilgrimage from west Africa to Mecca', Geography, 62-3, 1977, pp. 215-217. ③ Shair, I. and Karan, P., 'Geography of the Islamic pilgrimage', Geojournal, 3-6, 1979, pp. 599-608. ④ Sopher, D., 'Pilgrim circulation in Gujarat', *The Geographical Review*, 58-3, 1968, pp. 392-425.

3）①佐々木高弘「都市景観のなかの宗教」日本学報8，1989，105-128頁。②田中博『巡礼地の世界』古今書院，1983。③山口泰代「聖地的山里室生の景観の構造」人文地理49-2，1997，63-78頁。④ Pieper, J., 'A pilgrim's map of Benares', *Geojournal*, 3-2, 1979, pp. 215-218. ⑤ Tanaka, H., 'Geographic expression of Buddhist pilgrim places on Shikoku Island, Japan', *The Canadian Geographer*, 21-2, 1977, pp. 111-132. ⑥ Tanaka, H., 'The evolution of a pilgrimage as a spatial-symbolic system', *The Canadian Geographer*, 25-3, 1981, pp. 240-251.

4）人文主義地理学の問題点を指摘した初期のものとして，Cosgrove, D., 'Place, landscape, and the dialectics of cultural geography', *Canadian Geographer*, 22-1, 1978, pp. 67-72. を挙げておく。

て現れたのは，カルチュラルスタディーズと主体にかかわる問題を共有する新しい文化地理学と呼ぶべきアプローチであった[5]。この立場は，宗教景観をテキストとして扱い，それをつくり支える政治性を社会背景をもとにして明らかにするものであった[6]。ここでいう政治性とは，景観やその表象の生成をめぐる複数の主体による競合や交渉を意味する。たとえばグラハム（Graham）とマーレイ（Murray）によるスペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼ルートに関する研究では，公式な言説と非公式な言説を分析しながら，宗教的な要求と世俗的な要求のせめぎ合いによって聖地や巡礼のルートとしての景観が構築されることを明らかにしている[7]。そして宗教的な動機により巡礼を行う人々と，レクリエーションを目的とする人々が用いるルート双方が競合し交渉する過程で宗教的な意味が付与される，という議論がなされている。

このような分析視角は，日本における宗教的な巡礼の研究においても有効であると考えられる。巡礼ルートやその景観を対象にして，さまざまな作用がせめぎ合う複雑なプロセスの中で，巡礼の道がどのように形成され，そこにどのような宗教的意味が生成するかという課題は，宗教現象が政治や社会から自律的な文化現象ではない現代において重要である。

（2）問題の所在　本稿が対象とするのは四国遍路の遍路道（へんろみち）であり，遍路道はそのルート，形態，景観などの属性をもつ。本来，「遍路」とは弘法大師ゆかりの寺院や聖地をめぐる巡礼，または巡礼を行う者を指すが，本稿では便宜上，八十八か所の寺院や巡拝習俗などを含む研究対象の総体を「四国遍路」とし，また巡礼を行う人を「巡礼者」とする。

歴史学者の新城常三は『今昔物語集』に「四国の辺地」という表現がみられることから，四国遍路の起源はおそくとも平安時代末までさかのぼることができるという[8]。その四国遍路が民衆の間に浸透するのは江戸時代であり，享保期（1716～1734）に最盛期を迎える[9]。四国遍路は本尊や各寺院の宗派が異なり，弘法大師信仰にまつわる札所や聖跡を巡るものであることから，観音信仰にもとづき「本尊巡礼」と呼ばれる西国巡礼に対し，「聖跡巡礼」と呼ばれる[10]。

このような四国遍路に関する研究は不足しているといわれてきたが[11]，現在では一定の蓄積をみることができる[12]。地理学においても稲田道彦，田中智彦，田中博，原田昇によって絵図や体験記をもとに，古い遍路道の比定がなされ，また

5）大城直樹・丹羽弘一他「1980年代後半の人文地理学にみられるいくつかの傾向」地理科学48-2，1993，91-103頁。②Cosgrove, D. and Jackson, P., 'New directions in cultural geography', *Area*, 19-2, 1987, pp. 95-101.

6）①Cooper, A., 'New directions in the geography of religion' *Area*, 24-2, 1992, pp. 123-129. ②Kay, J., 'Human dominion over nature in the Hebrew Bible', *Annlas of the Association of American Geographers*, 79-2, 1989, pp. 214-232. ③Kong, L., 'Geography and religion: trend and prospects', *Progress in Human Geography*, 14-3, 1990, pp. 355-371. ④Pacione, M., 'The relevance of religion for a relevant human geography', *Scottish Geographical Journal*, 115-2, 1999, pp. 117-131. ⑤Park, C., *Sacred Worlds*, Routledge, 1994.

7）Graham, B. and Murray, M., 'The spiritual and the profane', *Ecumene*, 4-4, 1997, pp. 389-409. これは人類学者エーデとサルナウの巡礼現象へのアプローチを参照している。Eade, J. and Sallnow, M. J., 'Introduction', (Eade, J. and Sallnow, M. J. ed., *Contesting the Sacred*, Routledge, 1991), pp. 1-29.

8）新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房，1982。

9）前田卓『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房，1972。

10）弘法大師信仰と四国遍路との関係については，真野俊和『旅のなかの宗教』NHK出版，1980が詳しい。

11）①小嶋博巳「巡礼・遍路」（圭室文雄，平野榮次他編『民間信仰調査ハンドブック　上・理論編』雄山閣，1987）158-169頁。②真野俊和「巡礼研究の現況」日本宗教史研究年報1，1978，23-31頁。

12）①近藤喜博『四国遍路研究』三弥井書店，1982。②佐藤久光「四国遍路の社会学的考察（上）」密教学26，1991，29-47頁。③真野俊和編『講座日本の巡礼第二巻　聖跡巡礼』雄山閣，1996。④戸梶修蔵「江戸時代土佐の遍路道」土佐史談179，1988，56-71頁。⑤星野英紀『巡礼』講談社，1981，196頁。⑥前掲9）など。

寺院や遍路道の有する空間構造が考察されている。[13] さらに近年では，四国遍路をめぐる新しい事象にも関心が寄せられつつある。[14] 第二次大戦後から現代にかけての四国遍路は大きく変化しており，その変化の中で行政の事業や宗教界の行事，民間の巡礼者の団体により，遍路道は復元や整備がなされ，その過程で遍路道のもつ意味も変化し多様化しきたと予想される。したがって遍路道をめぐる行政・民間の団体など複数の主体による作用を社会的背景をもとに捉えることにより，巡礼の道のもつ多様な意味や，その政治性を明らかにする事が可能になる。

本稿が注目するのはとくに1970年代後半から1980年代にかけての歩道整備において，環境庁や建設省によって遍路道が調査され自然歩道へと整備されていくことと，それに対して民間の団体である「へんろみち保存協力会」により，1990年代に別個の遍路道が比定・復元されていく過程である。遍路の順拝手段の変化や背景となる社会状況にも留意しながら，異なる主体の双方が遍路道の価値を発見し，遍路道にそれぞれの意味を与えていく過程を考察する。

なお，本稿では文献や案内記などの刊行物の他に，主に全国紙とローカル紙の新聞記事，[15] 伊予鉄観光開発発行の『へんろ』，[16] そして巡礼者個人の体験記を用いる。また伊予鉄道株式会社（以下，伊予鉄と略称），建設省四国地方建設局（以下，四国地建と略称）での聴取を実施し，資料の提供も得た。

Ⅱ　遍路道の宗教性と行政による遍路の「発見」

（1）遍路道について　遍路道とは巡礼者によって使用された札所を結ぶ道であり，それを示すために道標が設置されている。慶長7年（1602）に阿波藩によって鳴門市撫養街道沿いの8か寺が駅路寺と指定され，享保年間には土佐藩により遍路排除の政策がなされることにより通行できる遍路道が制限された。[17] また有志によっても道標が設置され遍路道が示された。その道標設置の最初のものは江戸時代初期の宥弁真念による設置であり，道標建立のピークは中務茂兵衛らにより建立された明治時代後半である。為政者や有志により道標が設置された遍路道の多くは可視化され，案内記においても通行可能な道が記述されていった。[18]

ただし案内記に記されたルートが遍路の通るルートを詳細に規定してきたのではない。大正時代まで改訂刊行された真念の『四国辺路道指南』と細田周英の『四国徧礼絵図』を比較した田中智彦は，案内記の中に示されたルートの一部には曖昧な点があることを指摘し，案内記を詳細に読まなければ，ルートを判定することは困難であると述べている。[19] 巡礼者は道標に従い歩きながらも，その中で寺と寺を結ぶ道を経験的に選択していたと考えられる。

13）①稲田道彦「遍路道」（香川大学放送公開講座実施委員会編『道の文化』美巧社，1991）63-80頁。②稲田道彦「納経帳からみた四国遍路の経路と行程の変化」日本地理学会発表要旨集57，2000，488-489頁。③田中智彦「『四国へん礼絵図』と『四国辺路道指南』」神戸大学文学部紀要14，1987，41-61頁。④前掲3）②，⑤，⑥。⑤原田昇「四国八十八カ所霊場の宗教景観」香川地理学会会報13，1993，43-52頁。

14）道空間研究会（早稲田大学文学部）編・発行『現代社会と四国遍路道』早稲田大学文学部・道空間研究会，1994。また早稲田大学社会学研究科による1999年の『社会学年誌』40号では現代の四国遍路に関する特集が組まれ，道空間研究会のメンバーの他に宗教社会学者の星野英紀が寄稿している。

15）本稿では朝日新聞と四国新聞を主に用いた。

16）『へんろ』は，巡礼者と霊場各寺院を結ぶ情報誌として，弘法大師御遠忌1150年にあたる1989年4月より月刊で発行されている。もともとは伊予鉄観光開発と愛媛新聞の関係者が企画編集し，霊場会が監修という形で関与していた。1985年から霊場会は『へんろ』を通じて一般通知事項の告知を行うようになっている。主な講読ターゲットは先達であるという。坂田正顕「四国遍路と霊場会」前掲14）13-39頁所収。

17）「辺路街道筋村浦之事」（憲章簿）という法度。詳しくは，前掲12）④，62-65頁。

18）近年の自動車を用いる巡礼者のため，近年の案内記には複数の巡礼ルートを示したものもある。西村益一『四国八十八カ所詳細地図帖』雑誌四国，1987。

19）前掲13）③

四国遍路では，各寺院を訪れるだけでなく，「巡る」行為も宗教的な意味があると考えられてきた。巡礼中にはいくつもの戒律が設けられ，また「同行二人」と表現されるように弘法大師とともに巡ることが修行の1つと考えられてきたのである。さらに沿道の住民や，四国以外の地域にもみられる「接待講」をもつ村落の人々たちは，巡礼者に「接待」を行うことで自身の功徳を積むことができると考えてきた。この接待の場は寺社や「茶堂[20]」，そして遍路道であった。つまり巡礼者がその道の上で弘法大師の修行を追体験し，また沿道の人たちが接待を行うとき，通常は生活道であり，単なる寺院を結ぶ道が宗教的な意味をもつ「遍路道」になると考えらている[21]。

このような遍路道のもつ宗教性は身体的な歩く行為と深く結びついていた。歩いて巡礼を行うことにより，かつて弘法大師が四国を巡りながら行った修行を追体験し，また接待による人々との交流が可能となるのであり，それゆえ遍路道は宗教性を有していたのである。近代以降，公共交通機関を一部利用する巡礼者があったものの[22]，このような徒歩による巡礼は第二次世界大戦後まで続けられていた。やがて戦後の道路の整備と，それが容易にした1953年からの「伊予鉄観光社」を嚆矢とするバスによるツアーの出現，さらに自家用車などの乗り物を利用した新しい順拝手段の出現は，歩くという行為よりも寺を訪れることにより大きな意味を見いだしたといえる。そしてこのような戦後における徒歩以外の巡礼手段の普及によって，道標を頼りに巡る遍路道は使用されなくなり，荒廃の度を増していったことが指摘されており[23]，1979年の環境庁と建設省による合同調査でも報告されている[24]。さらに道路整備は古い遍路道を新たな道路に替え，かつての遍路道の破壊はさらに進んだ。遍路道は物的にも心象的にも消失していったのである。

（2）遍路の文化的価値の「発見」と活用　本節では，文化財行政と自治体の施策が遍路を価値づけていく過程を追いたい。文化財行政を取り上げることにより札所の寺院が文化的な価値を獲得する過程を捉えることができ，また自治体を取り上げることにより，文化的な価値を与えられた遍路が観光や地域活性の資源として活用されていく過程を捉えることができると考える。

文化庁の前身である文化財保護委員会によって独自予算の調査が可能になったことに伴い，1962年より文化財集中地区の特別総合調査が行われた[25]。「第一次五ケ年計画」でなされた特別総合調査の内容を示したものが第1表である。この調査の第3回として1964年から4年にわたり行われたのが，「四国八十八箇所を中心とする文化財特別総合調査」である。以後1968年の高知県下の調査に至る調査の成果は，各県ごとにまとめられた[26]。なお，建造物および宝物の保護を目的とする「古社寺保存法」（1897）によ

20）茶堂とは，遍路への接待の場としてだけでなく，地域の人々の集会や娯楽の場である。茶堂については①喜代吉榮徳「遍路と茶の話―茶堂の発生について―」四国辺路研究12，1997，1-13頁。②武田明「大師堂と接待の民俗」真野俊和編『講座日本の巡礼第2巻　聖跡巡礼』雄山閣，1996，130-146頁。③藤沢真理子『風の祈り―四国遍路とボランタリズム―』創風社出版，1997，162頁が詳しい。

21）たとえば，福永敬「四国遍路の構造分析」伝統と現代59，1979，66-76頁。

22）荒井とみ三『遍路図会』新正堂，1942では公共交通機関を利用して遍路を行う巡礼者が記述されている。

23）①西原シマ子「へんろ道（しろとり道）」遍路宿67，1980，33頁。②川崎正視「遍路道のはなし」四国民俗25，1994，50-51頁。

24）建設省計画局地域計画官建設省四国地方建設局企画部編・発行『昭和53年度国土総合開発事業調整費四国のみち保全整備計画調査報告書』1979。

25）『文化財保護委員会年報［昭和35～37年度］』1964，5-6頁。

26）①文化財保護委員会編・発行『四国八十八箇所を中心とする文化財（愛媛県下）』1964。②文化財保護委員会編・発行『四国八十八箇所を中心とする文化財（香川県）』1965。③文化財保護委員会編・発行『四国八十八箇所を中心とする文化財（徳島県）』1966。④文化財保護委員会編・発行『四国八十八箇所を中心とする文化財（高知県）』1967。

第1表　文化財保護委員会による「第一次五ケ年計画」の調査

Table 1　The Cultural Properties Protection Comisson's inquiry for temples which belong to Henro pilgrimage

	調査地区	調査件数	期間
第1回	伊勢神宮	300	1962年5月～6月
第2回	比叡山1	760	1962年9月
	同上　2	1,200	1963年5月～6月
第3回	四国八十八か所 愛媛県下	1,196	1964年5月
	同上　香川県下	2,480	1965年5月
	同上　徳島県下	800	1966年5月
	同上　高知県下	1,350	1967年5月

資料：各年の文化財保護委員会『文化財保護委員会年報』をもとに作成。

って，四国遍路の寺院が所有する美術品や建造物の多くが調査の対象とされたが，この文化財特別総合調査は，四国遍路を対象とした国による初の本格的な調査であった。こうした文化財行政による調査により，主として宗教的な価値を有していた四国八十八か所の寺院は，その建築や美術工芸品が文化財として指定されることにより文化・歴史的な価値を獲得した。そして文化財調査によって新たな価値を獲得した四国遍路は自治体の観光行政や地域活性化政策の中に取り込まれていくことになった。

観光資源として四国遍路を生かしていこうという試みは，香川県から観光開発の計画作成を依頼された環境開発センターによる計画（1962）の中に見ることができるが[27]，四国遍路や遍路道に多く関心が寄せられるのは1970年代になってからである。1972年の四国4県の知事会議で，愛媛県知事白石春樹は1973年にあたる弘法大師生誕1200年を機会に，四国八十八か所を中心にした新しい観光ルートの開発を提案した。その後愛媛県は専門家の協力を得て遍路道の調査を行い，国に対しても整備促進を働きかけてきた[28]。香川県でも1958年から各土木出張所の協力を得た香川県道路協会によって，また1975年には香川県観光課によって，香川県内にある道標と遍路道の調査がされた[29]。

1970年代後半からいくつかのシンポジウムにおいて，観光や地域活性化の資源として遍路や四国八十八か所が取り上げられていった。松山市にて開催された観光シンポジウム（1977）では，東京大学や愛媛大学から招いた専門家により文化的な観光資源として遍路を見直すべきであると提言されている[30]。また「明日の四国を考える高松会議'81事務局」による「明日の四国を考える高松会議'81」（1981）では[31]，会議に招かれた民俗学者によって観光や地域活性の資源として四国遍路の役割が評価されている[32]。さらに1982年から1983年にかけて「四国市長勉強会」が6回にわたり開かれ，徳島県日和佐町と高知県室戸市の代表による発表で，やはり四国遍路の役割の重要性が取り上げられている[33]。

四国遍路や遍路道への関心は，1973年の弘法大師生誕1200年や，1984年の弘法大師入定1150年御遠忌といった真言宗の行事とも深く関係している。弘法大師生誕1200年の前年にあたる1972年には，四国各地で四国八十八か所の寺院が所有する文化財を展示する「四国八十八カ所展」が開催された。また先の愛媛県知事の発言もこの弘法大師生誕1200年に注目し，1984年の

27）「香川県観光資源開発」四国新聞，1962，10月9日。
28）愛媛県生活環境部環境整備課編・発行『伊予路のへんろ道』1978，1頁。
29）1958年の調査については，古市寛『讃岐の道ばた』香川県道路協会，1963。1975年の調査については，「遍路の道標守ろう」四国新聞，1975年3月8日。
30）松山市史編集委員会『松山市史　第四巻　現代』松山市役所，1995，379-380頁。
31）この会議の共催は，香川県，高松市，四国経済連合会，香川県商工会議所連合会，日本青年会議所香川ブロック協議会，西日本放送，四国新聞社である。
32）「未来のために歴史を知ろう」四国新聞，1981年11月11日。
33）総合研究開発機構編・発行『四国市長勉強会報告四国振興へのみち』1985。

弘法大師入定1150年御遠忌を見据えたものであった。1984年に遍路を行った人は15万人になるといわれ[34]，伊予鉄によるバスツアーの参加者もバスのべ台数もピークを記録した[35]。「四国市長勉強会」で弘法大師にちなんだ観光開発を提案した高知県室戸市は，真言宗豊山派の御遠忌事業と提携した「空海まつり」を1983年に開催し，以後1998年に中断されるまで毎年これを続けた。さらに岡山県と香川県を結ぶ瀬戸大橋の開通（1988）によって，大規模な人口流動を予想して新たな観光資源を模索する自治体の多くが，四国遍路を観光に利用しようとしたと考えられる。

本章では，文化財調査により四国遍路や遍路道に文化財的な価値を与えられる過程，また弘法大師生誕や入定にちなむ真言宗教団の宗教行事とそれに伴う巡礼者人口の増大を視野に入れた四国4県や県内自治体が，四国遍路を観光や地域活性化の資源とみなしていく過程を確認した。それは，とくに1980年代以降の地域の歴史や民俗を再確認する社会的背景と重なっていたといえ[36]，その思想は環境庁と建設省による遍路道を利用した自然歩道の整備にも結びついていると考えられる。

III 「四国のみち」の整備

（1）歩道整備と「四国のみち」

「四国のみち」とは，四国内の国立・国定公園や文化財を結ぶ遊歩道であり，建設省と環境庁によって整備された。建設省ルートの正式名称は「四国のみち」であるが，環境庁ルートの正式名称は「四国自然歩道」であり，愛称として「四国のみち」と名付けられている。両ルートの策定には四国遍路が反映されており，とくに建設省ルートは明確に遍路道をモデルとして，これに沿うルートを設定している。したがって建設省ルートを中心に「四国のみち」の整備を詳しくみることにより，1970年代以降の社会的背景の中で遍路道が再発見され，宗教的な意味とは異なる意味を付されながらつくり出される過程を捉えることができる。

第2表　環境庁による「長距離自然歩道」の整備状況
Table 2　Hiking trails provided by the Environment Agency

名称（愛称）	整備年度	形状
東海自然歩道	1970～1974	
九州自然歩道（やまびこさん）	1975～1980	○
中国自然歩道	1977～1982	○
四国自然歩道（四国のみち）	1981～1988	○
首都圏自然歩道（関東ふれあいのみち）	1982～1987	○
東北自然歩道（新奥の細道）	1990～1996	○
中部北陸自然歩道	1995～	
近畿自然歩道	1997～	

資料：環境庁編『環境白書（各論）（平成11年度版）』，1999，189頁。
注）○は各自然歩道が環状（周回）であることを示している。なお，1970年の整備は厚生省による。

まず第2表は環境庁による「長距離自然歩道」の整備の状況である。長距離自然歩道は厚生省国立公園部により1970年から整備された東海自然歩道を嚆矢とし，1971年の環境庁発足後は環境庁によって事業がなされた。この環境庁による歩道整備の3つめに「四国自然歩道」（1981～1988）がある。長距離自然歩道は，国立・国定公園等の自然や文化財等の地点を徒歩で探勝するための歩道であり，健全な心身を育成するとともに，自然保護に対する理解を深めるという目的を掲げて整備された[37]。それはレクリエーションや余暇への関心の増大に応えるた

34）四国八十八カ所霊場会監修『遍路四国八十八カ所』講談社，1987。
35）伊予鉄道株式会社での聞き取り。
36）安井眞奈美「町づくり・村おこしとふるさと物語」（小松和彦編『祭りとイベント』小学館，1997）201-226頁。
37）担当課は環境庁自然保護局施設整備課であるが，事業主体は都道府県である。余暇・生活文化行政関係省庁連絡会議『地域における余暇・ゆとりの充実のために』ぎょうせい，1991。

めの整備でもあった。[38] 長距離自然歩道の特徴は，８つの自然歩道のうち５つが周回のルートであるように，基本的に環状のルートであることであり，単独では周回ルートでない自然歩道も他のルートと結合することによって環状をなしている。各ルートは１日で歩行可能な距離に分けられ，名称が付されている。そこでは近代以前の街道をモデルとしてルートを設定したり，旧街道を意識した名称が付されるなど，文化や歴史を強調した遊歩道が整備されている。また1975年の文化財保護法の改正を受けて，1978年には文化庁も文化財とその周辺の環境を含めた地域一帯を総合的に保護する広域保護区域として，「歴史の道整備活用推進事業」を開始し，初年度には奥の細道，中山道，熊野参詣道の調査に合計１億円を補助金として予算化している。[39] レクリエーションと文化財への関心の中で，遊歩道の整備が進められたといえるが，四国４県における調査は少なくとも1988年まではなされていない。

一方，歴史・文化，生活環境への関心の高まりを背景に，建設省も従来の自動車道整備に重点をおく方針への見直しから，歩道の整備に重点を置くようになる。1977年の第三次全国総合開発計画の事業として，歩道や自転車道の整備が始められるのである。1978年から「大規模自転車道」の整備が行われ，自転車や歩行者の安全かつ快適な通行の確保を目指し，1982年に道路構造令の一部が改正された。[40] こうした政策において，また建設省による唯一の自然歩道として「四国のみち」が整備されるようになった。建設省ルートは関係各自治体の働きかけを受けながら，四国地建の企画部企画課によって立案されたが，そのもとになるものとして，自然歩道整備のために遍路道を調査する「四国のみち保全整備計画調査委員会」が設立されたのは1978年であった。

（２）遍路道の調査　四国における遊歩道整備のために，「国土総合開発事業調整費」によって環境庁と建設省による合同調査（1979）や，「道路事業調査費」によって建設省と四国４県との合同調査（1980～1981）が行われたが，国土総合開発事業調整費での建設省の調査に当たって1978年に組織されたのが，「四国のみち保全整備計画調査委員会」であった。[41] これは学識者と行政担当者からなり，この下に建設省の職員や各出先機関の職員らで構成される「四国のみち保存整備計画調査幹事会」および「四国のみち保存協力整備計画調査事務局」が置かれた。

「四国のみち」保全整備計画調査は当初から遍路道の調査を企図して実施された。あらかじめ関連各市町村が調査確認した旧来の遍路道を，２万５千分の１地形図を使用しながら「へんろ道現況調査集計表」に記載し，写真撮影をあわせて行った。写真撮影の対象となったのは，道路の状況を示す遠景や道標などであった。また調査には自動車を使用し，自動車が進入できない所は，その入口付近だけを確認したり，地元民への聴取による補充が行われた。[42] 調査の結果をまとめた第３表から，使用されていない旧遍路道は５割強になり，他方，損壊せず利用されている遍路道は５割弱であることがわかる。こうした遍路道沿道の古い道標や丁石が倒壊していることを調査結果としてふまえ，歴史的価値をもつ文化遺産の保存と活用にあたる方向性が示された。

38）長田攻一「行政と四国遍路道」前掲14），41-72頁所収。
39）内田茂「文化財保護関係の事業計画」文化財３月号，1978，25-27頁。
40）建設省四国地方建設局監修『四国地方建設局三十年史』社団法人四国弘済会，1988，448-449頁。
41）浅野二郎（千葉大学教授），村上節太郎（愛媛大学名誉教授・聖カタリナ女子短期大学教授）が顧問，定井喜明（徳島大学工学部教授）が委員長をつとめた。
42）調査の方法に関しては，前掲24）77頁をまとめた。

第3表　環境庁・建設省合同調査当時の旧遍路道の状況

Table 3　Condition of the old pilgrimage route investigated by the Environment Agency and the Ministry of Construction

	徳島県	高知県	愛媛県	香川県	計
a	9	20	2	13	11
b	44	30	51	53	42
c	48	50	48	34	47

資料：前掲24）112頁。
注1）　aは昔の遍路道のルートが消滅し，現在は道路以外の目的で土地利用がなされているもの。bはルートは残っているが，現在はほとんど遍路道としては利用されていないもの。cはルートは現在も残っており，遍路道としても利用されているが，形態が変わっているもの。
2）　小数点以下は四捨五入して示した。
3）　単位：％

また「四国のみち」についての意識調査が四国内と四国外の住民に対して行われた。この調査の目的はレクリエーション活動への志向，遍路道に対する歴史的・文化遺産としての住民の認識を確認することであった[43]。無作為に選出した15歳以上の男女に対して調査票に基づく調査が企画され，四国内1176票，四国外（近畿・中国）504票が各県の人口比率に合わせて自治体に送付され，自治体から個人に配布回収された。「四国のみち保全整備計画調査委員会」による意思決定過程の詳細については報告書や資料に記載がないものの，これらの実地調査とアンケートの結果を得て「四国のみち」が立案されたと考えることが妥当である。

自然公園等施設整備費総事業費19億4600万円をかけて整備された「四国のみち」環境庁ルート（1981～1989）は，基本的に四国遍路に一致させることを目的とはしていないため，88か寺中の50か寺を通過するにとどまった。一方，建設省ルートは，四国を一周すること，自然に親しめる起伏にとんだ道であること，地域と語らいがもてること，旧遍路道や歴史上の道をできるだけ利用すること，現在ある道を利用すること，をルート選定の基準とした[44]。報告書では，多くの旧遍路道が荒廃しまたは消失していたという調査結果を踏まえ，歴史的・文化的価値をもつ遍路道の保存と活用のため，「四国のみち」を整備する必要性を説いているが，使用可能な遍路道が2割程度しか確認できず，現在ある道を原則として利用することを基本方針としていたことから，「遍路にとって必ずしも現在の旧へんろ道に固執する必要はない[45]」としている。すなわち，可能な限り遍路道をモデルとしながらも，基本的には使用可能な道をもとにそのルートは選定されたのであり，「『四国のみち』を使ってのへんろも決して不自然と考えられない[46]」という言葉からは，新たな遍路道を創出しようという意図が読みとれる。

（3）建設省による整備　「四国のみち」は主管となった四国地建道路道路計画第一課により整備が進められた。「四国のみち」の整備とは現存する歩道に「四国のみち」の道標を設置し，また路面の舗装をしていく作業である。しかし道の幅員は統一されておらず，路面もアスファルトや木材によって舗装されるなど整備を行う主体によって異なる。さらに建設省による「四国のみち」の整備は独立予算ではなく，道路整備事業の一環として行われ，道路整備の責任も環境庁のように1つではないため具体的な予算の内訳を明らかにして示すことは困難であるが，建設された道路種別によって，ある程度の見当をつけることは可能である。たとえば第4表は，建設省ルートの種別延長を示している。このう

43）　前掲24）177頁。
44）　前掲24）291頁。
45）　前掲24）352頁。
46）　前掲24）352頁。

第4表　建設省ルートの「四国のみち」の道路種別
Table 4　Types of "Shikoku-no-mich"'s road provided by the Ministry of Construction

県別	一般国道		県道	市町村道	農林道
	直轄	補助			
徳島県	10	—	39	35	16
高知県	2	1	54	39	4
愛媛県	21	7	21	36	15
香川県	21	8	33	22	16
計	13	4	37	33	13

資料：建設省四国地方建設局で入手した資料より作成。
注）単位：%

ち建設省が整備するのは直轄国道である。残る補助国道，県道は県の道路課が，市町村道は各市町村の道路課が整備を行う。農林道の場合，林道の種類として国有林林道と民有林林道があり，前者の所管省庁は林野庁であり，後者は地方公共団体が事業を担当している。この表から，補助国道，県道，市町村道をあわせると6割強になることから，各自治体が「四国のみち」の大部分を整備することになることが分かる。

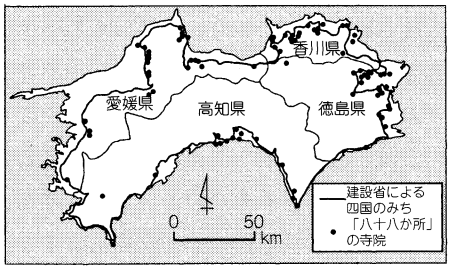
第5表は各県別の「四国のみち」の整備の進行状況である。各県の数値は建設省四国地方局による整備と関係各自治体による整備を合計したものである。各県内の「四国のみち」の整備・供用はそれぞれ進行状況に差があるものの，およそ，1991年度までは毎年度順調に整備・供用されている。しかし，それ以後は徐々に整備の進行が緩慢となり，1995年度以降はほとんど整備・供用が滞っているといってよく，1995年度から1998年度までに整備・供用されたのはわずか7.9 km になっている。こうして1999年度までの「四国のみち」は88%の整備率にとどまっている。

このようにして整備されたのが「四国のみち」建設省ルートである（第1図）。これは約56%が遍路道と重複している。ルートはさらに11のルートに区切られ，説明的な名称が付けら

第5表　建設省による「四国のみち」整備の進行状況
Table 5　Progress of the Ministry of Construction's service for "Shikoku-no-mich"

年度	徳島県	高知県	愛媛県	香川県	年度合計
1986	70.0	176.6	225.5	100.4	572.5
1987	114.6	205.1	242.6	108.9	671.2
1988	92.1	244.0	227.2	75.4	638.7
1989	122.0	270.3	249.9	113.8	756.0
1990	142.4	339.0	268.2	151.1	900.7
1991	174.8	164.4	320.6	353.3	1,013.1
1992	174.8	164.4	345.4	355.6	1,040.2
1993	186.9	169.7	354.2	363.3	1,074.1
1994	189.2	182.2	377.3	364.7	1,113.4
1995	195.0	184.2	392.7	382.9	1,154.8
1996	195.0	185.4	395.7	383.0	1,159.1
1997	195.0	188.3	395.7	383.7	1,162.7
1998	190.5	188.3	395.7	383.7	1,162.7

資料：1987年から1999年までの建設省四国地方建設局『道路行政ポケットブック』をもとに作成。
注）単位：km



第1図　建設省による「四国のみち」
Figure 1　Route of "Shikoku-no-michi" provided by the Ministry of Construction.
資料：前掲47）

れた。そこには関係する名所や自然などが取り入れられて，地域を表象するものとされている（第6表）。環境庁ルートの長距離自然歩道とは異なり，11のうち8つのコースは100km をこえており，1日で歩いて探勝する距離として設定されたものではない。しかしこのようにして四国地建により整備されている「四国のみち」は，歴史・文化・自然により人間性を回復する

第6表　建設省による「四国のみち」の各コース名
Table 6　Names of "Shikoku-no-mich"'s short courses provided by the Ministry of Construction

名　　称	区　　間	距離
八十八カ寺めぐりがはじまるみち	徳島県鳴門市～徳島県小松島市	104
緑に染まる山々から，南阿波の海と語るみち	徳島県小松島市～徳島県宍喰町	133
くろしおが洗う，太陽のみち	高知県東洋町～高知県高知市	157
おおらかな自然と出会う，土佐のみち	高知県高知市～高知県中土佐町	96
峠を往く。悠久の大河四万十川を越える。黒潮浪漫。岬を目指すみち	高知県中土佐町～高知県土佐清水市	150
西南の土佐から峠をこえて南予へ。潮の香りいっぱいのみち	高知県土佐清水市～愛媛県宇和島市	179
昔と今が隣り合う。文化・歴史の南予のみち	愛媛県宇和島市～愛媛県久万町	102
山と海が呼吸する，瀬戸風のみち	愛媛県久万町～愛媛県今治市	130
瀬戸の海，燧灘を感じながら，点在する霊場をめぐる東予から中讃へのみち	愛媛県東予市～香川県善通寺市	160
訪ねれば歴史，巡れば自然…心の学舎のみち	香川県善通寺～香川県志度町	90
八十八番札所を目指すみち	香川県志度町～徳島県鳴門市	69

資料：前掲47）
注）　単位：km

ためのハイキングルートとして紹介されている。[47] また四国地建の各出先機関は1984年から「四国のみちハイキング」を行っており，毎年のべ800人程度が参加している。

建設省の「四国のみち」について，報告書では遍路道の文化的・歴史的価値と，遍路道が育んできた巡礼者と地元住民との精神的交流からその意義が説かれる一方，四国遍路が真言宗信者のみによって行われていないこと，巡礼を行う動機や札所の使用目的が多様であること，さらには行政の宗教への中立性から，四国遍路が有する宗教的な意味には言及されていない。整備に先だって行われたアンケートでは，宗教としての四国遍路を問うものは見られない。さらに「四国のみち」のパンフレットにおいても，四国遍路の１番札所であり八十八か所の中で非常に重要な意味をもつ霊山寺に関する記載の記述量は他の札所と同程度であり，観光施設や景勝地の１つとして記述されている。[48] しかもこのパンフレットにおさめられた写真に巡礼者を撮影したものはない。こうしたことから，「四国のみち」は遍路道をモデルにして設定されているものの，その宗教性を排し，かつてそこが遍路道であったという歴史的・文化的な価値を強調しているといえる。1975年の文化財保護法の改正により宗教的な事象に関する違憲性が払拭され，宗教的な意味を文化的・歴史的価値へ置き換えられていくようになるが，[49] このような意味や価値の転換を「四国のみち」も行っているのであり，それゆえに遍路道をモデルとしながらも文化財を歩いて探勝するという，この時期の自然歩道の基本的な考えに一致させることが可能であったのである。

本章では遍路道を利用した「四国のみち」が建設省により整備されていく過程を述べた。「四国のみち」は余暇時間の増大と歴史や文化

47）　建設省四国地方建設局編・発行『パンフレット四国のみちを往く』1996では，「四国のみち」は，「人々が四国の美しい自然や四国特有の歴史・文化に触れ，また道すがらの人々との交流によって，人間性を回復するため」の道として紹介されている。
48）　建設省四国地方建設局監修「体感プロムナード１　四国のみち（改訂版）」四国建設弘済会，1996，７頁。
49）　1975年の文化財保護法の改正における宗教の違憲性をめぐる議論は，①菊池暁「民俗文化財の誕生」歴史学研究726，1998，１-13＋59頁。②才津祐美子「「民俗文化財」創出のディスクール」待兼山論叢30，1996，47-62頁が詳しい。

への関心の高まりに呼応して整備された。遍路道を地域の歴史的・文化的資源と見なしながら整備された「四国のみち」は，地方の歴史や民俗として四国遍路や遍路道を確認していく過程と連動しているのである。そして「四国のみち」は，かつて札所と道標を順に結ぶことで成立していた厳密に１つのルートに限定されていたとはいえない遍路道のルートを利用しながら，新たにつくり出されたものであった。四国のみちは遍路道のもつ歴史的なイメージをもとに創出されたものであるが，それは，遍路道のもつ宗教性を排除し，歴史や文化を象徴する文化遺産や，ハイキングコースに表される自然と健康といった，新たな意味を付与していく作業であったといえよう。

Ⅳ　もうひとつの遍路道

（１）「へんろみち保存協力会」について　本章では「へんろみち保存協力会」（以下，保存協力会と略称）の活動を取り上げる。保存協力会は愛媛県松山市で商店を営む宮崎建樹によって1988年より運営されている。個人が営む保存協力会を取り上げる理由は，その活動が巡礼者の不満を汲み上げ，また巡礼者に便宜を図る役割をもつと同時に，それがもう１つの遍路道をつくり出す主体であると考えるためである。

建設省や環境庁によって整備された「四国のみち」は，ハイカーや徒歩で遍路を行う人々に供されてはいたが，利用者を十分に満足させるものではなかった。たとえば徒歩による遍路の体験記を自費出版した白石正雄は「四国のみち」が主にアスファルトで舗装されていること，また歩道が車道のすぐ隣に付属的に設置されたものであることから，徒歩での遍路が困難であり危険であるという不満を述べている。[50] 1996年に高松市で開かれた「道づくり公開シンポジウム」（主催者：「四国の道路を考える会」，後援：四国地方建設局）で行った宮崎の批判はそのような不満を代表したものであった。宮崎は，行政によって整備されたアスファルト舗装の歩道が身体への衝撃の大きいことを指摘し，歩行者のための道路建設の必要性を主張した。また「四国のみち」の道標とコンクリート製の舗装が遍路道の景観を損ねていることも批判している。

また保存協力会は道標の設置，ガイドブックの作成を通じて，徒歩で遍路を行う巡礼者に対して情報提供を行っている。1987年に４番札所大日寺近くで宮崎自身が道に迷ったことを契機に，1988年に『へんろ』（月刊）で協力を要請した。1990年には徒歩遍路のためのガイドブックとして『四国遍路ひとり歩き同行二人』が出版された。このガイドブックは２冊から成り，１冊は遍路の心得やモデルプランが掲載され，他の１冊は２万５千分の１地図にルートを赤色で示す詳細な地図集となっている。保存協力会によるこのガイドブックは，他のガイドブックの中でも紹介されており，徒歩による現代の遍路を志す者にとって心強い手引きとなっている。[51]

この他徒歩による遍路を支援する事業として，独自の調査に基づく遍路道の比定と復元がある。以下では保存協力会によって「四国のみち」とは別の遍路道が比定・復元される過程を捉える。

（２）保存協力会による遍路道の比定と復元　保存協力会の活動内容をまとめたものが第７表である。保存協力会の最初の活動であるカラー鉄板を使用した道標の取り付けは1987年に始まっている（第２図）。その際の1,500本の道標取り付けは宮崎自身の私費で行われた。道標設置の２回目は直径約10 cm のシール，３回目には９cm ×14 cm のカラートタン製の掛け札が道

50）白石正雄『私の歩いた遍路道（下）』自費出版，1985。
51）たとえば，「徒歩で廻る場合，へんろみち保存協力会編の『四国遍路ひとり歩き同行二人』（全二冊）が詳しい」と紹介されている。四国遍路を愛する会編『四国八十八カ所　心の旅　癒しの旅』海竜社，14頁。

第7表　へんろみち保存協力会の主な活動
Table 7　Activities of private organization Henromichi-hozon-kyoryokukai

年	活動内容
1987	道標表示取り付け開始
1988	へんろみち保存協力会発足
1990	『四国遍路ひとり歩き同行二人』出版
1991	シール添付(1992年終了) 「へんろみち一緒に歩こう会」開始
1992	道標表示取り付け開始
1993	『四国霊場先達』出版 第1回草刈り奉仕開始
1994	『68歳からの同行二人』出版
1995	平成遍路石建立開始・巡拝団結成

資料：『へんろ』より作成。

第2図　へんろみち保存協力会による遍路道の立て札
Figure 2　Signpost set up by Henromichi-hozon-kyoryokukai

筆者撮影

標として用いられた。1991年からは保存協力会によって「へんろ道一緒に歩こう会」が開始され，当初は10人にすぎなかった参加者が1998年には約30人ほどを集めるまでになった。この会は宮崎が引率する徒歩巡礼者による遍路であり，参加希望者は費用を支払い，会に参加する。1993年からは「草刈り奉仕」と呼ばれる，保存協力会が発掘した遍路道の草刈り作業が始められ，1995年からは「平成遍路石」の建立がなされている。

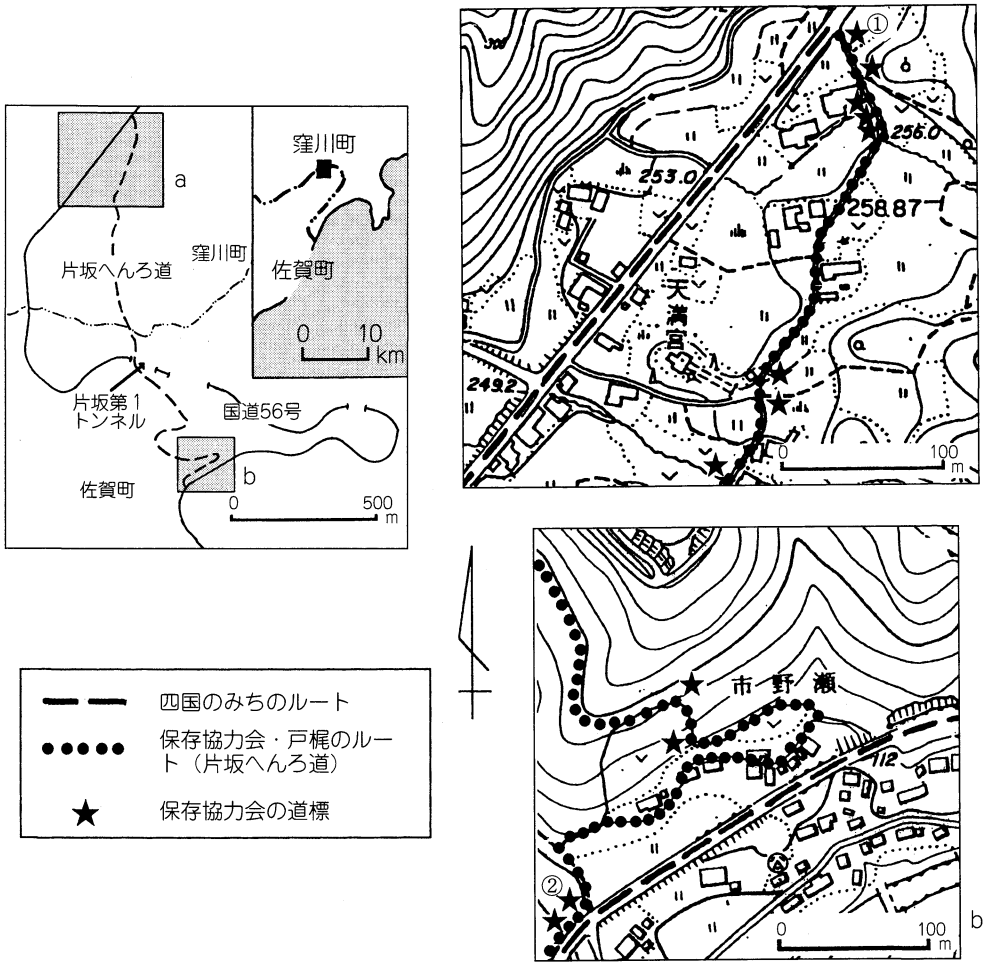
第8表　『へんろ』に掲載されたへんろみち保存協力会による遍路道の「復元」
Table 8　Henromichi-hozon-kyoryokukai's "restoration" for old pilgrimage routes reported in Journal *Henro*

年	掲載号	区間
1988	54	愛媛県上浮穴郡久万町
1989	64	徳島県神山町本名～駒坂 徳島県一宮町赤坂～13番大日寺
1990	81	高知県窪川町～佐賀町 （片坂へんろ道） 愛媛県東宇和郡宇和町 （歯長峠下り坂へんろ道） 愛媛県宇和町～大洲 （鳥坂峠へんろ道）
1991	90	高知県土佐清水市 （渚のへんろ道）
2000	201	徳島県徳島市地蔵峠

資料：『へんろ』より作成。
注1）「掲載号」とは『へんろ』に掲載された号数を示す。
　2）カッコ内の名称は『へんろ』において掲載されたルートの名称。

とりわけ保存協力会による道標やシールを表示する活動とガイドブックの作成において，遍路道の比定や復元は重要な作業となった。第8表は『へんろ』で取り上げられた，保存協力会によって復元された遍路道である。保存協力会が「発掘」した遍路道の全てが『へんろ』で取り上げられているわけではなく[52]，保存協力会による遍路道の発掘・復元は1988年の明石寺から岩屋寺にかけての復元から始まっている。保存協力会はガイドブックにおいて，異なる手段で巡礼を行う人々のために，同一地点に向かう複数のルートを示しているが，徒歩だけの遍路道

52）『四国遍路ひとり歩き同行二人』には，1994年に復元された焼坂峠を越えるルートが掲載されている。へんろみち保存協力会編・発行『四国遍路ひとり歩き同行二人（別冊）』1990，124頁。



第3図　片坂へんろ道

Figure 3　Pilgrimage route "Katasaka Henromichi"

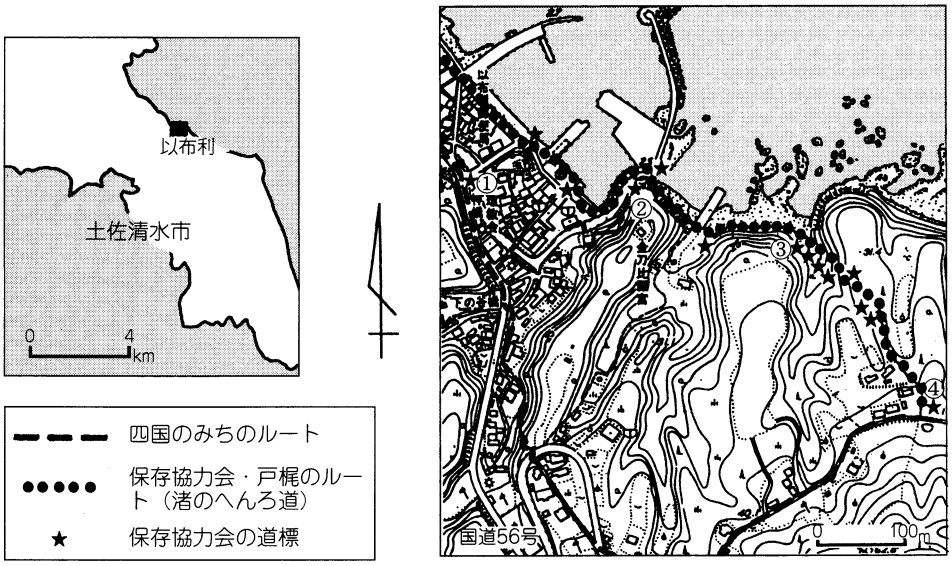
資料：前掲54）57頁および実地調査

を特別に記載していることから分かるように，徒歩による巡礼を奨励している。その徒歩巡礼者のための道のいくつかは，保存協力会が同定したものである。[53]

まず第8表で示した1990年に復元された3ルートのうち，高知県幡多郡窪川町と佐賀町にまたがる「片坂へんろ道」を取り上げる。このルートは，第37番岩本寺から第38番金剛福寺に向かう間にある，峰の上から市野瀬に至る道である（第3図）。図中に示した点線は戸梶修蔵によって，現存する道標をもとに比定された遍路道である。[54]「四国のみち」はトンネルのある国道56号を利用したルートであるのに対して，保存協力会のルートと戸梶によって比定されたルートは「片坂第1トンネル」の上にある標高約270mの峠を越えるものである。この片坂へん

53）保存協力会は，宥弁真念著『四国辺路道指南』，寂本著『四国徧礼霊場記』，武藤悳真著『四国霊場礼賛』，安達忠一著『四国遍路たより』および関係紀行文と現地での聴取をもとに，遍路道の復元を行っている。前掲52）

54）戸梶修蔵「近世土佐の遍路道地図」土佐史談183，1990，49-60頁。



第4図　渚のへんろ道
Figure 4　Pilgrimage route "Nagisa-no-Henromichi"
資料：前掲54）130頁および実地調査

ろ道は，現在の国道が開通した約40年前まで里道としても使用されてきたのを，真念の『四国辺路道指南』に記述された遍路道をもとに保存協力会が復元したものである。[55]

第3図aの道標①には「左折，片坂へんろ道」と書かれており，巡礼者に片坂へんろ道の始まりを示している。図で示した範域に四国のみちの道標はなく，巡礼者はこの片坂へんろ道を歩行することとなる。民家が建ち並ぶ歩道を抜けると，舗装された道から林道へと変わり，保存協力会による掛け札の道標が道を示している。そして第1トンネルの上にある山道を通過しながら，道標②のある国道56号との合流地点へと至るが，その距離は，四国のみちより1.6短縮されている。

また，第4図は1991年に高知県土佐清水市にある以布利付近に保存協力会が復元した遍路道である。平安末期の歌謡集『梁塵秘抄』に修験者たちが荒波がしぶく岩場を往来していた記述があるが，現在の海岸沿いの遍路道にはそのような体験が可能なものはなかったという。[56] この図では国道56号と民家の間を抜ける2つのコースが見られるが，渚の遍路道にさしかかる直前の道標①の地点に「土佐清水市経由」と書かれた保存協力会の道標があり，海岸方向へと向かうことを指示している。付近に四国のみちの道標はない。このルートは防波堤沿いから，道標②の地点に至ると海浜を歩く「渚のへんろ道」となり，道標③の地点まで続いている。ここからからは保存協力会の掛け札が示す林道を登り，道標④で四国のみちと合流することとなる。保存協力会はこの「渚のへんろ道」を，旧来の面影を残す「第一級のへんろ道」と評価するのである。

ここでは，「渚のへんろ道」が『梁塵秘抄』に記述された道かどうかは問題とされず，その

55）「3ルート復元」へんろ81，1990，4頁。
56）「あった!!　渚の遍路道」へんろ90，1991，2頁。

ルートを歩くことにより『梁塵秘抄』に記述された修行を再現できるという宗教性に意義を見いだしていることが読みとれる。

こうして保存協力会によって復元された遍路道は，年に2回の草刈り奉仕をとおして管理されている。また保存協力会のルートに問題が生じたときには，行政に対して改善を要求している。「渚のへんろ道」が工場の廃液によって汚染されたとき，また徳島県の鶴林寺付近にある遍路道が道路工事により破壊されたときにも，行政に対して改善措置を求めた[57]。このように保存協力会によって復元された遍路道の景観は，保存協力会の意図とそれにともなう実践によって維持されているのである。

（3）遍路道における意味の差異化　以上のような遍路道の比定と復元に際して，保存協力会は他のルートの有する意味とは異なる意味を自らのルートに付与している。そして，たとえば保存協力会が巡礼者に配布する「歩く遍路の遍路道情報[58]」では，高知県宇佐町から高岡町へと向かう途中にできた新たなルートに対して，旧来のルートを「何百年遍路先人たちが踏み固めてきた，祈りと，汗と，涙で彩られた伝統の道」と位置づけており，また草刈り奉仕のときに宮崎が保存協力会のルートに対して「この道はお大師さまが通られる」と語っているように[59]，自らの遍路道を真正なものとしているのである。保存協力会は他者と差異化しながら自らの道が真正なものであることを示すため，「片坂へんろ道」で述べたように，歴史的な史料をもとにして遍路道を復元している。前章で述べたとおり，四国のみちは古い遍路道をモデルとしながらも5割強しか重複しておらず，保存協力会はこのズレを歴史的資料をもとに埋めていくことにより，「四国のみち」よりも歴史的に真正な道であることを主張しているのである。

他方，「渚のへんろ道」のように宗教的な言説を付与することによっても，保存協力会は「四国のみち」との差異化を図っている。前章で考察したように，「四国のみち」は宗教性を排除し，歴史と文化，自然と健康といった意味を強調していた。これに対して，保存協力会によって整備された遍路道は，体験を通して獲得される宗教的な意味を強調して差異化を図っているのである。宗教体験においてはコスモロジーが必要であることが指摘されているが[60]，保存協力会が復元した道には宗教体験が可能になるようなコスモロジーが与えられているといえる。

『へんろ』に投稿された読者の体験記からは，保存協力会の遍路道が有する宗教的な意味を受容している様子がうかがえる。たとえば室戸市の遍路道に関する保存協力会のガイドブックの解説を読んだ巡礼者が1996年にこの遍路道をたどり，「この道こそ案内書に『弘法大師のすぐ後を追う錯覚に浸れる』とある，すばらしい古道」と感想を述べている[61]。また別の巡礼者は「渚のへんろ道」についても「ここが『先人の苦労偲べる，四国唯一の「渚のへんろ道」』だ。「渚のへんろ道」を歩けば，満潮や波しぶきに進路を阻止されて，先人たちの苦労を僅かながらでも偲ぶことができる」と，自身の体験を記述している[62]。こうした体験記からは，保存協力会が復元した遍路道のもつ宗教的意味が巡礼者によって受容されていることが分かる。そして歴史的な真正性と，宗教的な意味を付与しながら復元された保存協力会の遍路道は「宮崎さん

57）①「「渚の遍路道」に工場廃液」へんろ104，1992，7頁。②「工事で破壊され3年」へんろ113，1993，4頁。
58）「歩く遍路の遍路情報」は徒歩の巡礼者に対して配布されるA4サイズの情報紙で，不定期に刊行され，号数も付されてない。
59）「汗さわやか」へんろ189，1999，8頁。
60）上田紀行『宗教クライシス』岩波書店，1995。
61）「室戸の中世の遍路道」へんろ143，1996，8頁。
62）「太平洋の遍路道紀行5」へんろ142，1996，8頁。

の作っている道は本物の遍路道[63]」と語られるのである。

1990年代における歩くことの復権にともない，徒歩での巡礼者が増加したといわれ[64]，古い遍路道の再発見や草刈りなどによる整備が複数の主体により行われている[65]。また世代や目的が多様化しているといわれる巡礼者には[66]，保存協力会による遍路道の言説にとらわれない者もおり，たとえば「渚のへんろ道」よりも景色が良く快適な「四国のみち」のルートを主体的に選択する体験記も見られる[67]。こうした現代における徒歩や遍路道に対する関心の高まりの中の1つの活動に，保存協力会の活動も位置づけることができるのである。

本章では，「へんろみち保存協力会」が，「四国のみち」を含む他のルートに対して真正な道であることを主張しながら，独自の遍路道をつくりあげていった過程を述べた。そして保存協力会のルートはそれが本物であることを，他のルートが有していない歴史的な真正性，もしくは宗教的な意味を強調することによって示していったことを確認し，それが巡礼者たちにもある程度受容されていることも考察した。保存協力会の復元した遍路道がもつ宗教的な意味は，所与のものでなく，他のルートとの差異化の中で獲得されていったといえる。

V　おわりに

本稿は1960年代後半から四国遍路や遍路道が文化財・文化遺産や地域の資源として再発見され，1980年代以降に，2つの主体によって遍路道が生成される過程を追いながら，遍路道という景観のもつ意味が2つの主体による差異化の中で獲得されることを示した。遍路道は自治体により地域の文化遺産として再確認されたこと，また自然や環境への関心の高まりという社会的背景の中で，自然歩道として再創造された。この自然歩道に対して，別の主体であるへんろみち保存協力会は自ら遍路道を比定・復元していったが，それを真正なものとするため宗教的な意味を遍路道に対して付与している。つまり，現代において現出した遍路道という景観の宗教的意味は所与のものではなく，異なる主体によるせめぎ合いの中で獲得されているのである。

近年，メディアにて多く四国遍路が取り上げられている。NHKによって制作された四国遍路を主題とした番組は，1984年の「ミニ紀行・四国八十八カ所」，1990年の「けさの霊場」，そして1998年から2000年まで放送された「四国八十八か所こころの旅」の少なくとも3シリーズあり，「ふるさとの伝承」でも四国遍路が取り上げられた[68]。1984年以外の番組では，出演者が遍路道を歩きながら，遍路道沿道の地元の人々の生活や，巡礼者とふれあうことが特徴となっている。このように，道の意味をめぐるせめぎ合いからつくりだされた遍路道という景観やその意味は，とくに1990年代の精神的な事象や人間の「ふれあい」が重要とされる時代において，メディアを通じて流されている。

また，1998年に「えひめ地域づくり研究会」により，遍路道の世界遺産登録運動が始まり，以降宗教界，行政，経済界を巻き込んだ運動が展開している。こうした中で，巡礼の道である遍路道の景観がどのようにつくられ，どのよう

63）前掲35）
64）①井上三郎「増えてます『歩き遍路』」えひめ雑誌10-10，1995，26-31頁。②「今，なぜ『歩き遍路』か」四国新聞，1998年11月23日。
65）たとえば①「『情緒たっぷり』旧遍路道」へんろ66，1989，5頁。②「歯長峠遍路道で汗の奉仕　宇和島の遍路仲間5人組」へんろ140，1995，4頁。③前掲59）②など。
66）星野英紀「四国遍路にニューエイジ？」社会学年誌40，1999，47-64頁。
67）「遍路道ハイキング7」へんろ102，1992，4頁。
68）1995年9月24日放送。

な意味が与えられるのか，これからも見守る必要があろう。さらに複数の主体による遍路道の景観とその意味をめぐるせめぎ合いとは別に，それを利用する遍路やハイカーはそれぞれの身体を通して，言説にとらわれることなく遍路道の意味をつくり出している。ヘゲモニックな過程で生成された景観やその意味の流通，また情報の受け手の「読み」という問題については今後の課題としたい。

〔付記〕 調査にあたり，伊予鉄道株式会社の田中國廣氏，矢野隆氏，建設省四国地方建設局の岡本豊氏より多大なご協力を賜りました。記して心より感謝申し上げます。また本稿作成にあたりご指導いただいた関西学院大学地理学研究室の諸先生方，御助言くださった院生諸氏にそれぞれ感謝いたします。なお，本稿は2000年１月に関西学院大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

（関西学院大学・文学研究科・院生）

Contemporary Religious Meaning of the Pilgrimage Route

Masato MORI
Graduate student, Department of Geography, Kwansei Gakuin University

In geography of religion, the pilgrimage is one of the principal topics. Traditional approaches have dealt with old pilgrimage routes and the spatial structures of pilgrims and pilgrimages. Humanistic geographers have clarified the symbolic meanings of sacred places or religious landscapes. In the 1990s, some geographers, influenced by the "new cultural geography", have challenged associations between religious phenomena and politics.

This paper concerns a Buddhist pilgrimage route identified by signs, Henromichi, on Shikoku Island. While scholars of Henro have understood Henromichi's landscape and its religious meaning *a priori*, I will show that its landscape and meanings were built and obtained through conflict.

In 1960s and 1970s, the value of the Henro pilgrimage and Henromichi had been recognized as a cultural heritage and tourism resource by authorities. Then, from 1981, Henromichi was re-built for hiking by the Ministry of Construction, emphasizing its cultural value and excluding the religious meanings of the pilgrimage route.

On the other hand, a private organization, "Henromichi-hozon-kyoryoku-kai", also re-built pilgrimage routes from 1988. This group authorized its own route on the historicity and the religious meaning to claim its authenticity and differentiate it from others. In this process, Henromichi was built and obtained religious meanings.

Today, every pilgrimage route is built around a conflict between their authenticities and meanings. It is therefore important to clarify the relationships between religious phenomena and politics in Japan.

Key words : landscape, Henro pilgrimage on Shikoku island, Henromichi (Henro pilgrimage route), hiking trail, cultural heritage, religious meaning